
魔法の陸上

佐藤勝哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法の陸上

【Nコード】

N9945K

【作者名】

佐藤勝哉

【あらすじ】

最初は友達などいなくていい・・・
そんな考えだった人は中学になって、陸上部に入りいろんなことを知っていく。そして、ある店にはいつて優は全国優勝を目指す走り出していく物語。

優の笑い声は廊下まで響いてた、

「そう笑うなつて〜しょーちゃんもがんばってんだからね？ゆー」

左側の席から聞こえてきた

「お前やさしすぎだろ」

こいつは俺たち居残り仲間の朝月メイ♡あさつきめい♡女の子でもやさしいいやつだw

「そ、そんなことないよー><」顔を赤くして言った。

「あれれー？顔が赤いねえ、優に言われたことがそんなにうれしいのかな？」将が笑いながら言っている。

「しょーちゃ・・・！もう勉強教えてあげないからね！」起こりながらメイはいった

「わー！ごごごめんなさーい、言わないから勉強おしえてー；；；」

「あつはつはつは、メイ、将にはおしえなくていいぜ、教えたって全然頭にはいんないもんなーw」

「この野郎、自分がちょー！と成績いいからってなめやがって」軽く怒った感じの口調だ

「俺そんなによくないけどなーww」

バン！、机を叩いて立ち上がった将「このやるー」

「ちよつと、ちよつと、ストー！ープ、もーなんですぐ喧嘩になっちゃうかなー？」

「少し反省しなさい！」メイはたまにお母さんのように喧嘩をとめてくれる

「はい」優と将は声を合わせていった。

キーンコーンカーンコーンチャイムが鳴り響く

「よっしゃ！居残り終了！部活だああ！」優は突然元気になりはしやぎだしすぐに教室からでていった

「・・・><これ先生に出さなくていいのかな？>メイは思った口に出そうとしたが優はもういない。

>明日の居残り決定だな・・・>

第1章「友達」終

2章「部活」

バタバタ足音を立てて走っている

「ヤッベー、かんっぜんに遅れた！どしようかな・・・」外で1人
つぶばしっている

「うーん」立ち止まった。・・・立ち止まって考えてみた、・・・
考えてどうする？>

「俺ってバカなんだな・・・ははw」苦笑いをまげて笑った

「きおつけ！お願いします！」部活は優が来た瞬間にはじまった。

「ふー、」ため息を吐いた

座り込んでじつとしてしている、<さっさと行ったほうがいいよな>立
ち上がるとズボンが汚れてた・・・

「不幸ふふこつ」だぁ・・・」

せーの「おくれました」><

周りがやけに静か、それは皆走りに言ってるのだから当たり前だっ
た・・・。

ヒュー、風の音が聞こえる。「とりあえずたいそうでもするかな。」

「よしくぜー・・・」1人で言ってるとなんだか惨めな気持ちに
なってきた。

「まぁ、いいやとりあえずいこ・・・」バン！突然後ろから背中をパ
ーで殴られた

「イッターなんにすんだよ！」そこには1人の女の子がいた

「なーに、またサボってんの。w先生に怒られちゃうよ勉強は家で
やってこなきゃあ」

「H A H A 生野さん・・・」

この人は生野ルイ♡♡しょうのるい♡♡同じクラスで明るくとてもやさ
しい人だ

陸上初心者の俺にも色々と教えてくれるw」

H A H A じゃないっつーの^^;もー」

「まぁーいいや、一緒に走る？」

優はちよつとためらった。「いいの?」

「いいよwいいよw友達でしょお@」

「ありがとうございます」

俺はこの人だけには敬語を使っている。普段あまりしゃべれないが部活ではよく話す。

タツタツタツタ、走ってる隣にいる生野さんの顔があまり見れないと、いうより

顔を合わせることが恥ずかしくまだ、目を見て話したことがあんまりない……

「幸せだあ〜」顔をにやけさせながらボソッという。

「……なにわらってんの・w?」

返す言葉がない質問……かなり困った

「えーとえーと、きよ、今日一緒に帰りませんか!。」

<俺なにいつてんだ?????!>

「いいよ〜、家近いし帰ろつか^^」予想をしていなかった答え。ただですごくうれしかった。

「うん、ありがと……」

「ルイちゃん一緒にいこうよー」

「呼ばれちゃった。またアトでね^^」

そういつて振り返らず走っていった。

「キオツケーアリガトウゴザイマシタ!」キャプテンの声やまびこがきこえてくる。

「よっしやー、部活おわりいいいい!」

「おい、なによるこんでんだ?」

「あ、いやあーその、も、もっと部活したかったなー」

めっちゃ棒読み自分でいつてはさかしかった。

……

<部……部室がしずかすぎる……>

「ば、ばいばい」「さっさと退散したいさん〜自転車置き場まで走っていった。

「優おそーいwいくらまたせてんのー?」
「ごめんごめん、色々あつたんだよおw」
「もー・・・でも許してあげる^^」 <やさしーw>
「その代わりクレープとアイスクリーム優のおごりねーw」
やさしいのかな・・・?そこられへんは気にとめなかった。
「あーおいしー><すごいおいしいよー。なんで優買わなかったの?」
「・・・」
「お・・・今月のこずかいばあーだ・・・」
「ゆ・・・優ちゃん?ゆーーーーー!!」
はっ、なに考えてたんだろうボーっとしてた
「わりわり、でなんだっけ?」
「ねねあんなところにお店あつたっけ?」
「ほんとだー。」その店の名前は「カルチャー」文化「・・・」
「何だこの店?なんか、気味悪いなあ。」
路地の端側にある店普通こんなところ通る人はいない。
「変な店はいるのはやめようよ、・・・」
「えーそんなことないよー><ね、一回はいつてみようよー。」
生野さんにはさからえないなw
カランカラン。「いらっしやい」その声ははとても引くに声だつた・・・。

第2章「部活」完

魔法の陸上「Let」(前書き)

強く思え、好きな人を、強く思え、友達がほしいと、
なにもできない少年が強く思いを抱き始める。

ある、女の子がこの学校にはいつてきてから・・・。

魔法の陸上「Let」

第3章「好きな人」

俺の名前は「風原優」ゝかざはらゆうゝ勉強ぎらいの普通の中学生
1 ねんだよ

前は色々大変だったが今回もまたたいへんそうだ．．．；；
「いらっしゃい」低い声だった。

「うっわー、人間ぼくねえ、化けモンじゃねえの？」優が小声でル
イに話しかける。

びし！優の頭に強いチョップがあたった。「いつて！なにすんだよ
！」

「あんた、ちよつとは人のことかんがえなさいよねえ。ああ言う人
気もい人だっているんだから。」

お．．．お前のがひどいじゃないか．．．優は声にはあえて出さ
ず頭の中で思った

「こちらの席にいらっしゃいなああ。」

「はあい。優いくよ^^」

「ま、いいかな．．．」

席に着くと注文表がきた、中にはわけのわからないメニューがたく
さんのつていた。

「うおつまじかよ、なんだこのメニュー？」

「．．．．．」

「生野さんどうしたの？」この人は「生野ルイ」まあ、いい人かな

．

「いやちよつとメニューが．．．」

まあ．．．な女の子にはきついか。

「ちよー楽しみなんだけどー」

「はあああああ！？」ありえない、この人どういう神経してんだ

よ……

「ね^^そう思うでしょw」

「う……うん」

俺が注文したのは、「ペッパーチョコレート」一番まともそうだった。<これですかよ>

生野さんが注文したのは「マグロ&ストロベリーライスステーキ」

<む……無理がある>

「ねえ、生野さん、これ本当にたべるの?」きたのは本当に名前の通り。

マグロの上にストロベリーアイスの上にラウスとステーキが……

・ありえねえ

「うん^^そうだよ ゆーも食べる?」「いや、いらねえ」

俺のここにも得体の知れない物体がきていた「うえ、俺もういいや。」

見てるだけで気分が悪くなってしまった。

それに比べ生野さんは……「ぱくぱくぱくぱく……ん……」>

<おいし……^^」

正直今日ほど生野さんをすごいと思ったことはない!俺は思うでも、ここ結構人多いんだ。もつと人通りの多いところに店だせばいいのに

「はぁーおいしかった。でようか^^」それが一番いい

「お会計、5000円になるですねえ」

「あれ、生野さんお金は?」「へ?ゆーのおごりでしょ。」

「……」

「うん^^わかればよし^^」

「ふっふっふっ」

なに笑ってんの?といたげな顔をしてる。

「こ〜んげ〜つ〜のお〜こずかい〜全部ない〜」

「え!あんた何に使ってんの?????」「自覚なし

生野さん以外に天然……

んー、外は涼しかった、中はとても暖かった証拠だ落ちていく夕日なんだか

自分の姿が消えていくような感じ。

「今日はたのしかったよ^^ばいばーい^^」

ばいばい、手を振りながら去っていった。

長く感じた1日強もこれで終わりだなw

「母さんかえったよ。」「おかえりい」

「そうそう明日転入生が来るんですってねえ」

「え？そうなの？」

「女の子らしいわよww可愛い子だったらいいわね」

な・・なにを望んでいるんだ。

「ふーん、」

<リアクションスクナ！>

「とにかく俺は疲れたからすぐに寝るおやすみ」

「あら、どうセルイちゃんと遊んでたんでしょwいいわね青春」

「ば、ばかじゃなねえの！そ・・・そんなのじゃねえよ！」

「うふふ」

親はとにかくこういうのが好きだ、結構迷惑なんだよなあ……

「うん！とにかく寝よう明日は思い切り楽しんですごそう！」

<あ、宿題……ま、いつかーw> z z z

「ああー、明日は新しい友達ができるんだよねー^^楽しみwどんな人がいるんだろうな^^」

第3章「好きな人」終わり

魔法の陸上「Let」（後書き）

うんうん好きな人って自分を強くさせてくれるよね！

次回は第4章「転入生」今度も見てね

じゃあ、おやすみーzzzz

魔法の陸上「Go!」(前書き)

転入生が来て優の気持ちが変わっていく・・・
第4章「転入生」はじまりです

魔法の陸上「Go!」

俺の名前は風原優「かざはらゆう」中学1年生だよんw昨日はつかれたあ。今日は思い切り遊ぼう！

第4章「転入生」

「おはようございまーす。」朝の7時半優は学校で先生たちにあいさつをしていた。

「んーなんてすがすがしい朝なんだ、すがすがしすぎて死んでしまいそうだ。。。」

「もうちよい、多いな声だしなさいよねー」でた、昨日は個に人のせいで疲れている

今日だつてまだ疲れてるみたいだしなあ。この人は生野ルイ「しようるい」明るくていい人なんだが

ちよつと食文化が違うようだ・

「わかつてるつて〜だから静かにして。。。」

くな。。なんでこんなにもテンション低いんだ??> のせい。。が自覚なし。

「そーだ、今日転入生がくるんだつてね^^どんな人がくるんだろー?」

「シラネ」。。私なんかしたのかな?と聞いたげな顔をしている。

あ、終わったみたいだから先にいくね。。ばいばいー

そういつて走り去っていった

「ばいばいつて。。クラス一緒じゃん。。」

席に着けー先生が支持を出していた。俺も一度こんな封にいはつてみたいなあw

「えー、今日は転入生がいます」ざわザワ周りが騒ぎ立てていった。もちろん俺はそんなこと知っているからそんなに騒ぐことじゃなかったが

「ゆう優！、聞いたかよ転入生だつてよ！」隣で言っているのが桐癒将「きりゆしょう」一様親友つてやつかな。

「知ってるつてば大きな声出さないでくれよー。」

「へー、がらにもなく疲れてんな、何してたの？」

「・・・ちよつとな・・・」

シズカにー先生の声でクラスがピタつととまった

あらためて先生つてすごいなあ、と、思った。

「ではでは、転入生の入場です！男たち喜び！女たちよ悲しめ！転入生のおなーりー」

あ、やつぱり先生はバカだ

がらガラガラ入ってきたのは身長150cmくらいの女の子だったわあーすっげーきれいな子・・・俺と同じくらいの身長で目がパツチリと開いている

人形さんみたいだった。当然クラスの男女関係なく騒ぎ立てた。

「では、自己紹介からおねがいますねえ〜」

「はい、わかりました^^」

「私の名前は風時、時音「かぜときときね」「

「好きなものはえーとお肉・・・かなww」

「おー・・・お肉つて女の子だよなあw」

「じゃあ、自己紹介もすんだしんー風原の隣にすわつてようか。」

「え、？俺の隣？・・・ま・・・まじかあああああ！」

俺は喜びのあまり叫びそうになつてしまった。

「風時です^^あなたの名前は？」

「ああ、俺は風原優「かざはらゆう」だよ」

「へー風を〜かざ〜つて呼んで優なのに男の子つてwwwwwwww」

「う、う、そんなあー・・・」

「冗談だつてばw」ああ、そうなんだ・・・

「コラ、授業中だぞ風原静かにせんか！周りの男子から恨まれるぞ」

「へ？」このやろー楽しく話しゃがつて・・・

「ほっほー男子のがん飛ばしばねえすなあw」

キーンコーンカーンコーン「授業終了！何して遊ぼうかなー？」

「あの私まだこの学校にことあんまり知らないので案内してくれま
すか？」

「ん、俺でいいならいいおお〜」キッ！その時男子の目線が俺に向
いた。

今日は俺の命日になるかもなー

「んで、ここが理科室……このくらいかな教
えるところは大体教えてたと思うよ」

「うん、ARIGATOやさしいね^^風原さんは^^」

「か・風原さんなんて「風原が優でいいよw」

「わかつたじゃあゆーちゃんね^^」

<なんか、生野さんとかに似てる……>

じゃあ、俺部活だからいくよじゃあなー

相手の返事を聞かずに走っていった、

……

「ふーー@部活終了！遊ぶぜ！」

キャプテン「このクソガキめ」

<おおっと小声のつもりかな？バリバリ聞こえてんだけど……>
ばあああ〜い

タツタツタツ……あ？

「ゆーちゃん^^お疲れサマー^^」

「なんで風時さんがいるの？」

「一緒帰ろうと思ってw家近いんだよ^^知らなかった？」

<だ、だから俺の母さんあんなに喜んでたのか!?!>

「それに、私も風時さんじゃなくて、「時音」でいいよ^^」

「わかりますたあ」声が裏返った、はずかしい

なんで顔赤くなってるの？「さ・さあ？」

「優帰ろ……」「あ、ごめん今日時音と帰る約束してたんだわ

りいな」

「うん・・・仕方ないか・・・ばいばーい」

ばいばい、という前にはもう生野さんはいなかった。どうしたんだらう？

「帰ろうよゆーちゃん^^」

「そうだな」帰り道ではるんなこおを聞かれた特にへんなことはなかったが好きな人を聞かれたとき

急に顔が赤くなったので好きな人がいるのきずかれたかも；；

「ふー、ともかく時音は不思議ちゃんだなあ、ま、そこがおもしろくていいんだけどなw」

「何にやけてんの？あつ！そうか！今日の転入生がかわいかったんでしょーwwwwww」

<親は勘が鋭い！改めて実感した！>

「べべべべべ、別に！時音のことどう思ってるわけじゃねーよ！」

「あら！もう呼び捨てで読んでるんだ！いいわねえ〜」

「もう・・・やだ；；；」

今日はもう寝よう。生野さんにも明日謝ろうかな。

時音は・・・頭の中にずっと浮かんでいる

「はあ、何なんたる時音のことずっと考えてる俺・・・・・・・・・・」
明日も一緒に遊べるのかな・・・・・・・・・・

第4章「転入生」終わり

魔法の陸上「Go!」(後書き)

転入生が来たときから優の気持ちが変わっていく
次回第5章「争い?」

次回もみてね^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9945k/>

魔法の陸上

2010年10月15日23時47分発行